

# 手紙に憑かれた人々

## 『荒涼館』研究

宮川 和子

### 序

Charles Dickens 中期の大作、『荒涼館』( *Bleak House* 1853 ) は、Edmund Wilson も述べているように<sup>1</sup>、「探偵小説」のジャンルに入れることが可能である。『荒涼館』の「探偵小説」としての側面に焦点を当てる場合、「手紙」が極めて大きな役割を果たしていることに気づく。Edgar Allan Poe も、同様のプロットを持つ物語、すなわち影響力の大きい手紙が人から人へと循環するという物語を書いている。『盗まれた手紙』( *The Purloined Letter* 1845 ) がそれである。『荒涼館』と『盗まれた手紙』の類似性は、Christine Van Boheemen-Saaf によって指摘されており<sup>2</sup>、両者の比較は有益であろう。『盗まれた手紙』については、Jacques Lacan が解釈を行い<sup>3</sup>、さらに Lacan の解釈を Jacques Derrida が批判している<sup>4</sup>。この二人の論文もまた、『荒涼館』解釈に役立てたい。

#### 1 『荒涼館』と『盗まれた手紙』の関連性

最初に、『荒涼館』と『盗まれた手紙』の共通点を考察する。まず、『荒涼館』では、手紙がどのように循環するかを簡単に見てみよう。Lady Dedlock がかつて Hawdon に宛てて書いた手紙は、Krook から Tulkinghorn、Tulkinghorn から Bucket 警部へと持ち主が代わる。Krook は「自然発火現象(Spontaneous Combustion)」によって焼死する。Tulkinghorn は、一時的に Lady Dedlock に対して優位に立つことができるが、結局、彼がスパイとして雇っていたフランス女 Hortense によって射殺される。このように、手紙を手に入れるや否や、その所有者は所有物によって支配され呪われていると知るのである。

次に Poe の『盗まれた手紙』に移ろう。まず、『盗まれた手紙』が『荒涼館』に影響を与えた可能性を指摘した Boheemen-Saaf の説明をここに引用する。

Dickens had met Poe in Philadelphia during his American tour of 1842, and had promised to find an English publisher for *Tales of the Grotesque and Arabesque*. Though publication of "The Purloined Letter" postdates their meeting, it seems unlikely that Dickens, who had kept in touch with Poe, would not have read this *Tale*.<sup>5</sup>

『盗まれた手紙』では、「さる高貴な方」から「D 大臣」、「D 大臣」から Dupin へと手紙が循環する。ここに、警視総監の説明を引用する。

[T]he disclosure of the document to a third person, who shall be nameless, would bring in question the honor of a personage of most exalted station; and this fact gives the holder of the document an ascendancy over the illustrious personage whose honor and peace are so jeopardized.<sup>6</sup>

すなわち、「手紙」は次の二点で『荒涼館』におけるのと同じ効果を持つ。ひとつは、手紙の内容が暴露されることによって、「さる高貴な方」 Lacan に従えば「王妃」と思われる<sup>7</sup> の名誉と安全が危険にさらされるということ。ふたつ目は、「手紙」を所有する者が「王妃」に対して優位に立つことができる、という点である。

## 2 Lacan による『盗まれた手紙』分析

つぎに、Lacan による『盗まれた手紙』の分析を取り上げよう。Lacan は、この短編小説を「第一場面」と「第二場面」とに分割し要約している<sup>8</sup>。ここでは、それをさらに簡略化して紹介する。まず、「第一場面」は、王宮の私室で演じられる。「王妃」と思われる、さる高貴なお方が一人にいる時、ある手紙を受け取る。彼女は、「王」と思われるもう一人の高名な方の入室により困惑する。王妃は机の上に、手紙を開いたままにしておく。宛て名のある方が上

になり、内容はわからないままになっており、手紙は王の注意を引かない。この時、D大臣が入って来る。手紙は、大臣の山猫のように鋭いまなざしから逃れられない。大臣は、問題の手紙とほぼ同じ外観の手紙を取り出し、それを読むふりをして、問題の手紙の横に置く。そして少しおしゃべりした後、問題の手紙に手を伸ばす。王妃はそれに気づいていたが、王の注意を引くのを恐れ、何もできない。

「第二場面」は、大臣の事務室である。大臣がしばしば夜中に家を留守にするのにつけこみ、警察は頻繁にここに通り、邸宅とその周辺を徹底的に捜し回るが、手紙を見つけることはできない。そこで、Dupinが大臣の家に行く。Dupinは、手紙を探しているのを大臣に悟られぬよう緑色の眼鏡をつけている。Dupinは部屋の中を物色し、暖炉のマントルピースの真ん中につるされた紙製の紙差しの箱の中にある、しわだらけの手紙に気づき、それが問題の手紙であると確信する。その放置された手紙は、外観が目的の手紙とは正反対であったが、大きさは全く同じであったからである。

Dupinは故意に嗅ぎ煙草入れを忘れて行く。その翌日、彼は問題の手紙と同じ外観の手紙を携え、煙草入れを取りに行く。買収しておいた男が街頭で打った空砲の音を聞きつけた大臣が窓の方へ行ったすきに、Dupinは手紙を奪い、にせの手紙を紙差しに入れ大臣の家を去る<sup>9</sup>。

さて、今紹介した二つの場面において見られる三角関係を、Lacanは次のように分析している。

第一は何も見ないまなざしである          王であり警察である。

第二は、第一のまなざしが何も見ないのを見て、第二の隠しているものが覆われているのを見ていると思いつまなざしである。

これは、王妃であり、また大臣である。

第三は、以上二つのまなざしによって、その二つのまなざしがものを横取りしようとする人間に対して隠すべきものを剥き出しに

しているのを見ているまなざしである。これは大臣であり、最後にデュパンである<sup>10</sup>。

さらに、Lacan はこの関係を三匹のダチョウにたとえている。つまり、二匹目のダチョウは、一匹目が頭を砂の中に突っ込んでいるので、自分は見られていないと信じているが、実は三匹目が二匹目の背中の羽を静かにむしっている、という三すくみの関係である<sup>11</sup>。この三角関係を Lacan は「相互主観的な複合(the intersubjective complex)」と呼んでいる<sup>12</sup>。

### 3 『荒涼館』における手紙の循環と Lacan

これまで見て来た三すくみの関係は、『荒涼館』でも見られる。場面は、Dedlock 家のロンドンの屋敷である。法律顧問の Tulkinghorn が訴訟に関する書類を Lady Dedlock と Sir Leicester の目の前で読んでいる。偶然、机の上の手紙を見た Lady Dedlock は衝動的にたずねる。“Who copied that?”<sup>13</sup> と。Tulkinghorn は、彼女の常ならぬ口調に驚くが、Sir Leicester はうたた寝をしていて、何が起こったのか気づかない。やがて Lady Dedlock は気分が悪くなって退室する。Sir Leicester は悪天候ゆえに彼女は体調が悪いのだという位にしか考えないが、一方、Tulkinghorn は Lady Dedlock の挙動に不審の念を抱き、問題の書類をコピーした代書人の身元を確認しようと調査を開始する。

ここにおいて、三すくみの関係が形成されているのがわかる。つまり、第一の視線は Sir Leicester であり、彼は何も見ていない。第二は Lady Dedlock であり、彼女は Sir Leicester が何も見ていないのを見て、秘密は隠れたままになっていると信じている。第三は Tulkinghorn、彼は誰であろうと秘密を知ろうとする者に対し、最初の二人によって秘密がさらけ出されるがままに放置されているのを見ているのである。

さて、その秘密とは何か？まず例の代書人の正体から明かせば、本名は

Hawdon であり、Lady Dedlock の昔の恋人である。公式には、彼は溺死したものと誤って報告され、Nemo という偽名を使って生きていたのである。そうとは知らない Lady Dedlock は、彼の筆跡を見て大いに衝撃を受けたのである。結局の所、Nemo は Krook の家で死体となって発見され、あとに残ったのは一束の古い手紙のみである。そして、その「手紙」こそは Lady Dedlock がずっと昔 Nemo に書いたものなのであった<sup>14</sup>。

この「手紙」は欲望の対象となり、その循環が数々のトラブルを引き起こす。Nemo の死後、家主の Krook が手紙を自分のものとして所有する。Guppy はその手紙を奪うために、友人の Jobling を Weevle という偽名で、もと Nemo の住んでいた部屋に住まわせ、Krook を見張らせる。Jobling の報告から、Krook は文字の一つ一つを目で見えて写し取ることはできても、意味を読み取ることはできないことがわかる。Krook は手紙を読んでもらうために Jobling に手紙を手渡す約束をしているが、Guppy はにせの手紙の束を Krook のもっている手紙とすりかえるつもりである。ここで Guppy のセリフを引用する。

I tell you what. The first thing to be done is, to make another packet, like the real one; so that, if he should ask to see the real one while it's in my possession, you can show him the dummy.(p.506)

にせものと本物とのすりかえという Guppy の企みは、まさに『盗まれた手紙』で大臣や Dupin が使った手口と全く同じである。Dickens が『盗まれた手紙』を読んでいた可能性は高い。もしそうであれば、『盗まれた手紙』で繰り返された手口が『荒涼館』ではパロディー化され、結局は Krook の「自然発火」によって阻まれるということとなる。

この出来事によって、Guppy はせっかく Lady Dedlock に対して一時持っていた影響力を失ってしまう。この事件以前に、Guppy は Chesney Wold の館の彼女の部屋で Lady Dedlock と会っていた。そして、Esther の本当の父親は Hawdon であり、Hawdon が死後残した一束の手紙は Guppy のものと

なるという情報を彼女に与えていたのである。Lady Dedlock は、Guppy に “ You may bring the letters, if you choose. ” (p.466)と云う。この答えから、Guppy が Lady Dedlock に対して大きな影響力を獲得したことがわかる。しかしながら、Krook の自然発火のせいで手紙が燃えてしまったと信じ込んだ Guppy は Lady Dedlock を再度訪れ、その旨を告げる。かくして Guppy は影響力を失うこととなる。

Krook の死後、彼の親戚であると称し、Smallweed 家の人々が Krook の家にやって来て、紙くずを捜し始める。Tulkinghorn はいつのまにか Smallweed 老人の顧問弁護士となっている。紙くずの中から Smallweed が発見した手紙は、結局、Tulkinghorn の手に落ちる。

かくして、Lady Dedlock の秘密を握り、彼女に対して優位に立った Tulkinghorn は、Sir Leicester や彼の親戚連中、そして Lady Dedlock のいる前で、他の誰かのゴシップであるかのように装いつつ、Lady Dedlock の話をする。

Now this lady preserved a secret under all her greatness, which she had preserved for many years. In fact, she had early in life been engaged to marry a young rake - he was a captain in the army - nothing connected with whom came to any good. She never did marry him, but she gave birth to a child of which he was the father.(p.629)

これは、Lady Dedlock に対する暗黙の脅しである。この後、Tulkinghorn は、彼の部屋で Lady Dedlock と話し合いを持ち、Lady Dedlock の過去のことは、しばらくは誰にも言わないでよくと告げる。Lady Dedlock は、Tulkinghorn の意のままになって生き続けなくてはならないということを知る。Lady Dedlock は、このスキャンダルが彼女のメイド、Rosa にまで害を及ぼすのを恐れて、Rosa に屋敷を去らせる。Tulkinghorn は、この Lady Dedlock のふるまいを “ a violation of our agreement ” (p.715)と受け取り、彼女に告げる。

Our agreement is broken. A lady of your sense and strength of character will be prepared for my now declaring it void, and taking my own course.(p.716)

Tulkinghorn はいつ彼が Sir Leicester に Lady Dedlock の秘密を打ち明けるのかということについては正確な答えを与えるのを避け、Lady Dedlock をどっちつかずの不安な状態に陥れたままにする。

All things considered, I had better decline answering that question, Lady Dedlock. If I were to say I don't know when, exactly, you would not believe me, and it would answer no purpose. It may be tomorrow. I would rather say no more. You are prepared, and I hold out no expectations which circumstances might fail to justify. I wish you good evening.(p.717)

なぜ、Tulkinghorn は、このように曖昧な答えしか与えないのだろうか？それは、Lady Dedlock にゆっくりと苦痛を与えるのを楽しんで、彼女に対する彼自身の優位を確かめたいということもあるだろう。だが、ここで他の可能性も考慮されるべきであろう。つまり、手紙が Tulkinghorn に何らかの影響を与えているのではないかという可能性である。

ここで、再び『盗まれた手紙』に戻り、大臣と Tulkinghorn の態度を比較したい。大臣もまた、彼が所有する手紙を実際には決して使用しようとしなない。そのことについては、Lacan が次のような説明を与えている。

手紙の意味とは無関係に、手紙を使用することが、大臣にとって義務的なものであるとすれば、支配力を目的としたこの使用法は実行に移した場合たちどころにその効力が消えるものであるから、あくまでも潜勢的な性質をもっているのは明らかである...

大臣が状況から得ている支配力は、従って、手紙に起因しているのではなくて、彼がそのことを知ろうと知るまいと、手紙が大臣に

与えている役割に起因しているのだ<sup>15</sup>。

この説明は Tulkinghorn にも適用できるだろう。つまり、Tulkinghorn が力  
を行使するという目的のために手紙を使うや否や、手紙の効力は消え去ってし  
まうということである。それゆえに、彼ができるのは、せいぜい、秘密を Sir  
Leicester に打ち明けるという意図をほのめかし、Lady Dedlock を不安な宙  
づり状態のままにしておくこと位である。Tulkinghorn は、長年、忠実な法律  
顧問として Sir Leicester に仕えて来た身である。彼が秘密を暴露すること  
どのような結果が引き起こされるか予想もつかない。すなわち、Lady Dedlock  
が Dedlock 一族から追放されるかもしれないし、あるいは、Tulkinghorn の  
行いが Sir Leicester の怒りを買って、Tulkinghorn 自身が現在の安定した地位  
を失うかもしれない。つまり「手紙が構成している矛盾と醜聞の記号」<sup>16</sup> が重  
大であるがゆえに、Tulkinghorn は決定的な行動を取ることができなくなっ  
ている。このように、「手紙」が Tulkinghorn にある役割を与え、彼の行動を規  
制しているのである。つまり、「所有者」が「所有物」によって支配されてい  
るのだとも言える。

結局、Tulkinghorn は、帰宅後、Hortense に射殺されてしまう。この事件  
の捜査を任された Bucket 警部の説明によれば、殺人事件の起こった晩に  
Tulkinghorn を訪れた者が三人いた。それは Hortense、Tulkinghorn に憤り  
を持っている射撃場主の George、そして Lady Dedlock である。Lady Dedlock  
は階段で George とすれ違っている。

Lady Dedlock の方は George とすれ違ったことに気づいていたが、George  
は “ I saw a shape so like Miss Summerson's go by me in the dark ” (p.766) と  
言うだけで、それが Lady Dedlock だったとは気づかない。そして、Hortense  
は階段の上方から Lady Dedlock を見ていたのである。このように、三人はお  
互いに極めて近い位置にいたのである。ここにおいて、例の三すくみの関係が  
再び見出される。すなわち、第一の視線は George であり、彼は Lady Dedlock



の正体に気づかない。第二は Lady Dedlock であり、彼女は George が彼女の正体に気づかないと知り、彼女のひそかな訪問が誰の注意も引いていないと信じる。さて、第三は Hortense、彼女は、Lady Dedlock の秘密の行動が剥き出しになっているのを見ており、Lady Dedlock に殺人の罪を着せようと決意する。

Hortense は、LADY DEDLOCK と書いた手紙を Bucket 警部に送り、さらに、Sir Leicester には、LADY DEDLOCK, MURDERESS と書いた手紙を送る。ところが、Hortense は、Bucket 警部の家に下宿しており、Bucket の妻、Mrs Bucket によって見張られていた。つまり、これらの手紙がすべて Hortense によって書かれているのを、Mrs Bucket が見ていたのである。ここにおいて、Hortense は、以前、Lady Dedlock が占めていた位置である、三すくみの二列目に来ることとなる。かくして Bucket は Hortense という真犯人を挙げ、Sir Leicester からの懸賞金百ギニーは、Bucket のポケットに入る。

この懸賞金の問題は注目に値する。『盗まれた手紙』の中でも、Dupin は五万フランの報酬と引き換えに、見つけた手紙を警視總監に渡している。ここで、どのような方法で Dupin が「手紙の象徴的回路」<sup>17</sup> から逃れることができるかという問題に関する Lacan の主張に注意を向けたい。Lacan に従えば、金は「どのような意味作用からも生じる一番破壊的な意味表現」<sup>18</sup> である。Lacan は、Dupin を精神分析医にたとえている。精神分析医もまた意味表現<sup>シニフィアン</sup>を扱うのであり、その意味表現<sup>シニフィアン</sup>が一時的に精神分析医とともにとどまる。この意味作用を無化し、精神分析自体が意味表現<sup>シニフィアン</sup>の巡路から脱出するために、金銭は最も効果的な方法となる<sup>19</sup>。Bucket の場合も同じであり、手紙を所有したために Krook や Tulkinghorn が被った「記号の呪い」<sup>20</sup> を免れるためには、百ギニーを受け取る必要があったのである。

#### 4 Derrida による Lacan 批判と、『荒涼館』の手紙の行方

これまで見て来たように、様々なケースへの Lacan 理論の適用は、手紙の

動きに伴う劇的な役割交替の発見に役立った。Lacan の『盗まれた手紙』分析を Derrida が批判しているが、その Derrida の主張にも注目したい。Derrida は、Lacan が精神分析的解釈の適用に都合がよいように、「目に見えぬ枠付け」<sup>21</sup>を行う結果、「二つの三角形をはみ出すすべてのものを除外」<sup>22</sup>してしまう可能性を指摘する。すなわち、『盗まれた手紙』の中から、間主観性に基づく三角関係が二つ取り出されたことは述べたが、それ以外の要素についても考察する必要があるということである。同様に、『荒涼館』分析もまた、Lacan の理論が適用可能な、ある一定の枠組みの中で論じられて来たのである。しかし、この枠を超えた部分にもまた目を配ることが必要であろう。

「手紙」によってもたらされた結末は、『盗まれた手紙』と異なり、『荒涼館』では悲劇的である。『盗まれた手紙』では、「手紙」が無事に「王妃」のもとにたどり着くことが暗示され、秘密は決して「王」のもとには伝えられない。しかし、『荒涼館』では、Lady Dedlock には、昔、Hawdon という恋人がいたこと、最近、Hawdon の下宿や墓地を訪れていたことなどを Bucket が Sir Leicester に告げる。そればかりか、Sir Leicester をゆすって金をせしめることをもくろんだ Smallweed が手紙についてこのように述べる。“ They were letters from the lodger's sweetheart, and she signed Honoria. ” (p.787) Sir Leicester はひどい衝撃を受けるが、彼の心の中では Lady Dedlock に対する同情や愛情の方がまさっているのである。彼がほとんど口をきけない状態に陥った後も、石板に、“ Full Forgiveness. Find ” (p.820)と書いて Lady Dedlock を受け入れていることがわかる。この時点で、手紙はその効力を失い、行き場を失ったかに見える。つまり、Bucket は、少なくとも彼の力の及ぶ範囲内では、手紙を「掟の秩序」<sup>23</sup>に戻すのに成功したのである。

しかしながら、Bucket の影響力の及ばない範囲では、手紙の破壊的な力は決して衰えることはない。しかも、この力は Hortense の存在によってさらに強化される。ここで、Hortense が Lady Dedlock の分身であることを論じておきたい。彼女が Lady Dedlock の分身であると考え理由は四つある。一つ

目は、彼女の名前 “ Hortense” と、 Lady Dedlock のファースト・ネーム “ Honoria ” が、“ h,o,r ” の三文字を共有していること、二つ目は、Lady Dedlock に変装した Hortense は、Jo が Lady Dedlock と見間違えるほど Lady Dedlock に似ていたこと、三つ目は性格の類似性、そして、四つ目は、最も重要なのであるが、Hortense が Lady Dedlock の代理人として、彼女の欲望を行動に移しているということである。たとえば、彼女をじわじわと苦しめる Tulkinghorn に対して Lady Dedlock が殺意を抱いていたことは十分考えられることであり、この殺意が最大値に達したとき、Hortense は実際に Tulkinghorn の心臓を打ち抜いたのである。

Hortense によって書かれた手紙は、Lady Dedlock を死へと駆り立てる役目を果たす。Hortense は Lady Dedlock に殺人の罪を着せるため、Bucket、Sir Leicester、そして古くから Dedlock 家に仕える女中頭の Mrs Rouncewell にも手紙を送りつける。Bucket と Sir Leicester 宛の手紙は、Bucket が真犯人を割り出し、Hortense を逮捕した時点で効力を失う。しかしながら、Mrs Rouncewell 宛の手紙は Bucket の注意を逃れる。この手紙の中には、下の部分に LADY DEDLOCK, MURDERESS と書き加えられた、Tulkinghorn の死体発見に関する新聞記事の切り抜きが入れられていた。Mrs Rouncewell は、殺人の容疑で拘留されている息子 George を何とか救いたいという気持ちから、受け取った手紙を Lady Dedlock に見せる。Lady Dedlock は、自分が殺人犯として疑われていると思込む。

さらに間の悪いことに、Guppy が現れ Lady Dedlock に次のような情報を持ってくる。

*I strongly suspect ... that those letters I was to have brought to your Ladyship were not destroyed when I supposed they were. That if there was anything to be blown upon it is blown upon.(p.814)*

かくして、Hortense の手紙と Guppy の情報は、Lady Dedlock を窮地に追い

込む。彼女は屋敷を去り、Hawdon の墓地のそばで死ぬ。

このように、Lady Dedlock が Hawdon に書いた手紙は Hawdon の死後、循環し、この循環の過程で、手紙は複数のメッセージに分割される。それは Smallweed の視線や Guppy の視線によって分割されたのであり、彼らが得たそれぞれのメッセージは、Sir Leicester や Lady Dedlock のもとに送り届けられたのである。

さらに、Hortense の手紙は、まるで Lady Dedlock の手紙の歪んだ鏡像のように作用する。二人の差出人は分身関係にあり、どちらの手紙にも Lady Dedlock の名前が記入され、それが決定的効果をもつ。両方の手紙が共犯関係となって、Lady Dedlock を死へと駆り立てたかのように見える。

このような手紙の経緯をたどれば、結局、Lacan の述べる「<sup>シニフィアン</sup>意味表現の物質性」<sup>24</sup> もまた疑問に付されることとなろう。ここで、Lacan の説明を引用する。

この物質性は多くの点において奇異であって、その第一の点は、分割に耐えないということである。手紙を小さく引きちぎってみても、やはりそれは手紙のままなのである<sup>25</sup>。

この手紙の分割不可能性もまた、Derrida の批判の対象になっている。Derrida によれば、「手紙の破壊不可能性は、手紙を一つの意味の理念性へと高めることと、関係がある。」<sup>26</sup> 手紙は、Lacan 的定義によって、「音声的<sup>・</sup>文字」<sup>27</sup> へと変容し、音声中心主義における、話されることばの特権が手紙に与えられているのである。すなわち、現前し、生きており、そして真正である、という特権である。

ここで、『荒涼館』における Lady Dedlock の手紙の場合を考えよう。それは複数の視線のもとで分割され、それゆえにいかなる確かな目的地をも持つには至らない。これは、Lacan の「手紙は常にその送り先に到着する」<sup>28</sup> という

原則に反する。分割された手紙の断片のひとつは、Smallweed によって Sir Leicester に送りつけられたが、これは Sir Leicester の卒中の誘因となり、言語障害を惹き起こす。別の断片は、Guppy によって Lady Dedlock に届けられ、彼女を死へと駆り立てる。このように、Bucket は完全には手紙をその適切な進路に戻すことができず、部分的には失敗していると言えるのである。すなわち、手紙には、一つの確かな目的地というものはなく、むしろ複数の目的地があったということになる。

### 結び

本稿では、手紙の循環がもたらす効果が論じられた。手紙を所有する人々は、実際には手紙によって取り憑かれ、操られていたのである。循環の過程で、手紙は複数の視線によって分割され、確かな目的地を失い、いかなる人間の制御力をも超えた破壊力を持つに至った。

Dickens は作家になる前に、すでにこの手紙(文字)の力を認めていた。ここに Dickens の文字への鋭敏さを示す、一つのエピソードを紹介したい。少年時代の暗黒の日々、Dickens が工場であくせく働いていたときのことである。厳しい仕事の後、彼はロンドンの街路をぶらぶら歩いた。Dickens はセント・マーチンズ・レイン (St. Martins Lane) にあった、ある一軒の店のことを述べている。

...I only recollect that it stood near the church, and that in the door there was an oval glass plate with 'COFFEE ROOM' painted on it, addressed towards the street. If I ever find myself in a very different kind of coffee-room now, but where there is such an inscription on glass, and read it backwards on the wrong side, MOOR EEFFOC (as I often used to do then in a dismal reverie), a shock goes through my blood.<sup>29</sup>

このように、概念が彼の心から消え、ただ文字のイメージのみが彼の目の前に残ると、彼は文字の不気味な力が増して行くのを感じたのだ。

Dickens は文字（手紙）の不可思議な力を知っており、それゆえに『荒涼館』のような小説を創り出したのであろう。その作品の中では、文字（手紙）があたかも生きている怪物のように扱われ、その力はひどく魔術的であるがゆえに、読者は、登場人物同様、操られ、魅せられてしまうのである。

## 註

- 1 Edmund Wilson, “ Dickens: The Two Scrooges ” in *The Wound and the Bow: Studies in Literature* (Athens: Ohio University Press, 1947), p.31.
- 2 Christine Van Boheemen-Saaf, “ ‘ The Universe Makes an Indifferent Parent ’ : Bleak House and the Victorian Family Romance ” in *Psychiatry and the Humanities*, Volume 6: Interpreting Lacan, ed. Joseph H. Smith, M.D. and William Kerrigan, Ph.D. (New Haven and London: Yale University Press, 1983), p.256.  
Boheemen-Saaf によれば、19 世紀に探偵小説が誕生したことは、当時の人々の科学力信仰、そして起源についての無意識の気付きと関連する。Boheemen-Saaf の『荒涼館』解釈の一部をここに紹介する。Boheemen-Saaf は Lady Dedlock の手紙が、父的口ゴスと法を脅かす存在であると指摘する。さらに、Lady Dedlock の秘密を探り明かそうとする父的存在としての Tulkinghorn が、新しいタイプの父的存在 Bucket によって取って代わられることを述べ Bucket が 19 世紀の科学力への信仰に基づいた新しいタイプのヒーローであるとする。本稿では、Bucket の父的存在としての完全性に疑問を呈し、Lady Dedlock の手紙の制御しがたい破壊力を見てゆく。  
また他に、Lacan 理論の影響下に『荒涼館』を分析したものとして Katherine Cummings の “ Rereading *Bleak House*: The Chronicle of a ‘ Little Body ’ and its Perverse Defence ” in *Telling Tales: The Hysteric's Seduction in Fiction and Theory* (Stanford: Stanford University Press, 1991)がある。Cummings は、Esther の語りが矛盾した二つの観点を提供していると述べる。ひとつは、法と秩序の名のもとに父権社会が維持してきた「真理」に忠実であろうとし、もうひとつは、女性らしさをパロディー化し、父親たちを笑いものに行っていると論ずる。ただし、本稿では、Esther のこうした二面性については論じていない。
- 3 Jacques Lacan, “ Seminar on The Purloined Letter, ” trans. Jeffrey Mehlman, *French Freud, Yale French Studies*, 48 (1972) pp.38-72. 邦訳に関しては、佐々木孝次訳「《盗まれた手紙》についてのゼミナール」(『エクリ』東京：弘文堂、1972)を参考にした。
- 4 Jacques Derrida, “ Le Facteur de la Vérité ”in *The Post Card*, trans. Allan Bass, (Chicago : The Chicago University Press, 1987), pp. 411-96. 邦訳に関しては、清水正・豊崎光一訳「真実の配達人」(現代思想臨時増刊号 10 巻第 3 号 1982)を参考とした。

- 
- 5 Boheemen-Saaf, *op.cit.*, p.256.
  - 6 Edgar Allan Poe, “ The Purloined Letter ” in *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe* (New York : Vintage Books, 1975), p.209.
  - 7 Lacan, *op.cit.*, p.41.
  - 8 *Ibid.*, pp.41-2.
  - 9 *Ibid.*, pp.41-3.
  - 10 *Ibid.*, p.44.
  - 11 *Ibid.*, p.44.
  - 12 *Ibid.*, p.44.
  - 13 Charles Dickens, *Bleak House* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd. 1971), p.61. 以下、本書からの引用は括弧内にページ数を示す。
  - 14 『盗まれた手紙』では、最後まで手紙の内容は明らかにされない。Lady Dedlockの手紙については、ある程度、恋文であるらしいことは推測されるが、結局、具体的な内容は最後まで明らかにされない。この点で Lady Dedlock の手紙もまた、『盗まれた手紙』における手紙と同様、シニフィエ(意味内容)なきシニフィアン(意味表現)として扱うことは可能であろう。ただし、内容がほのめかされていることによって、最終的には、複数のシニフィエ(意味内容)を生み出すことになっている点では異なっている。
  - 15 Lacan, *op.cit.*, p.63.
  - 16 *Ibid.*, p.63.
  - 17 *Ibid.*, p.68.
  - 18 *Ibid.*, p.68.
  - 19 若森栄樹 『精神分析の空間』(東京：弘文堂、1988), pp.115-116.
  - 20 Lacan, *op.cit.*, p.61.
  - 21 Derrida, *op.cit.*, p.483. Lacan は Poe の作品に枠付けし、単純化しているという Derrida の批判に対して、Barbara Johnson は、Derrida もまた Lacan 批判において、Lacan が明言していないことをしているかのように述べて、枠付け (“ framing ” 罪に陥れる、はめる、の意あり。)を行っている論ずる。一例をあげれば、Derrida は Lacan が「手紙」にファロスの特権的地位を与えていると批判しているが、実際には、Lacan は「ファロス」という言葉を使っていない点がある。詳しくは Barbara Johnson, “ The Frame of Reference; Poe, Lacan, Derrida ” in *The Critical Difference* (Baltimore: The John Hopkins University Press, 1980), pp.110-146 を参照されたい。
  - 22 *Ibid.*, p.483.
  - 23 Lacan, *op.cit.*, p.69
  - 24 *Ibid.*, p.53.
  - 25 *Ibid.*, p.53.
  - 26 Derrida, *op.cit.*, p.466.
  - 27 *Ibid.*, p.465.
  - 28 Lacan, *op.cit.*, p.72.
  - 29 G.K. Chesterton, *Collected Works of G.K. Chesterton Volume XV: Chesterton on Dickens* (San Francisco: Ignatius Press, 1989), p.65.

---

(神戸英米論叢 14号 [2000年] 149-163頁)